

鉄道駅の立地と周辺地域の変化

—兵庫県姫路駅とはりま勝原駅に注目して—

北川 淳也

キーワード：鉄道駅，姫路市，新駅，駅周辺の開発，住宅地

1. はじめに

本研究の目的は、姫路市の鉄道駅に注目し、駅が私たちの生活や周辺地域にどのように影響するのかを考察することである。2008（平成20）年、私の住む近くに「はりま勝原駅」が新設開業し、周辺地域は大きく変貌した。最近では2011（平成23）年頃から姫路駅周辺の開発、整備が進み大きく様相を変えている。

本研究では、文献資料によって、全国の新駅と姫路市の新駅を比較しながら歴史的な推移と現状を明らかにする。次に、姫路市役所を訪問しインタビューをして、姫路駅とその周辺整備の状況をまとめる。はりま勝原駅の利用の変化や周辺の土地利用については、統計資料により分析する。このようなウォーキングを重ねながら、私たちのよりよい生活を形作っていく鉄道駅のあり方や周辺地域の変化について、姫路駅とはりま勝原駅に注目しながら、動向を明らかにし、今後は展望したい。

2. 鉄道駅の歴史と役割

日本の鉄道の歴史は、1872（明治5）年の10月14日に、新橋—横浜間が開通したときから始まったといえる。きっかけは、1854（嘉永7）年にアメリカ使節が持参した蒸気機関車の模型を、日本人が直接目にし、その後ペリーが13代将軍、徳川家定に献上したことである。

明治維新後は、1877（明治10）年の西南戦争、1894（明治27）年に起きた日清戦争や1904（明治37）年の日露戦争を経て、鉄道は政府の軍事力増強と中央集権国家設立の中核を担っていった。

大正から昭和初期にかけての比較的平和な時期には、首都圏にJR路線の原型が生まれ、郊外に私鉄網が形成された。地下鉄も1926（昭和元）年12月30日、浅草—上野間に開業し、鉄道は首都圏から郊外へと広がっていった。

1931（昭和6）の満州事変から第二次世界大戦の終戦までは、平和な時代から一転して、再び戦争の時代である。1938（昭和13）年に出された国家総動員法に伴い「陸上交通事業調整法」によって、鉄道は明治の時代と同じように、効率的な戦時輸送の役割が前面に打ち出された。

1945（昭和20）年に第二次世界大戦が終わると、GHQによって日本の鉄道に関する大きな2つの改革が行われた。1つは、財閥解体と同じように、戦前に国策で統合された大私鉄が解体されたことである。「大東急」が、東急、小田急、京王、京急、相鉄の元の状態に戻され、近鉄は南海を切り離し、京阪神急行が阪神と京阪に分割された。もう1つは、政府下にあった「国鉄」の公社化であった。1949（昭和24）年には、「公共企業体」を採用し、新しく「日本国有鉄道」が生まれた。

昭和40年代（1965年～）には、高度経済成長によって首都圏の地価が高騰し、郊外に人々の住まいが移っていった。それに対応し、首都圏、京阪神、中京圏などの大都市圏で、

地下鉄や私鉄の新線が開通していった。

一般の会社員が郊外にマイホームやマイカーを持てるようになり豊かになった反面、経済や社会は、競争原理のもと効率化やスピード化が求められるようになった。それが影響し、国鉄は、1980（昭和 55）年に 1 兆 84 億円の赤字を出し、長期債務残高も 14 兆円に達した。「国鉄再建法」による赤字路線の廃止を断行したが、赤字問題は解決しなかった。1987（昭和 62）年に「国鉄民営化」が実施されて日本国有鉄道は解体し、JR 7 社（北海道、東日本、東海、西日本、四国、九州、貨物）へと生まれ変わったのである。こうして重大な課題であった赤字問題解決の方向性が示され、現在の日本の鉄道の原型が完成したのである。

3. 姫路市の鉄道駅

姫路市には 2 つの鉄道会社の路線がある。2016（平成 28）年現在、姫路市内の JR 西日本と山陽電車の駅は、それぞれ図 1 のように並んでいる。2016（平成 28）年 3 月 26 日に JR 姫路駅と御着駅間に東姫路駅が開業予定である。

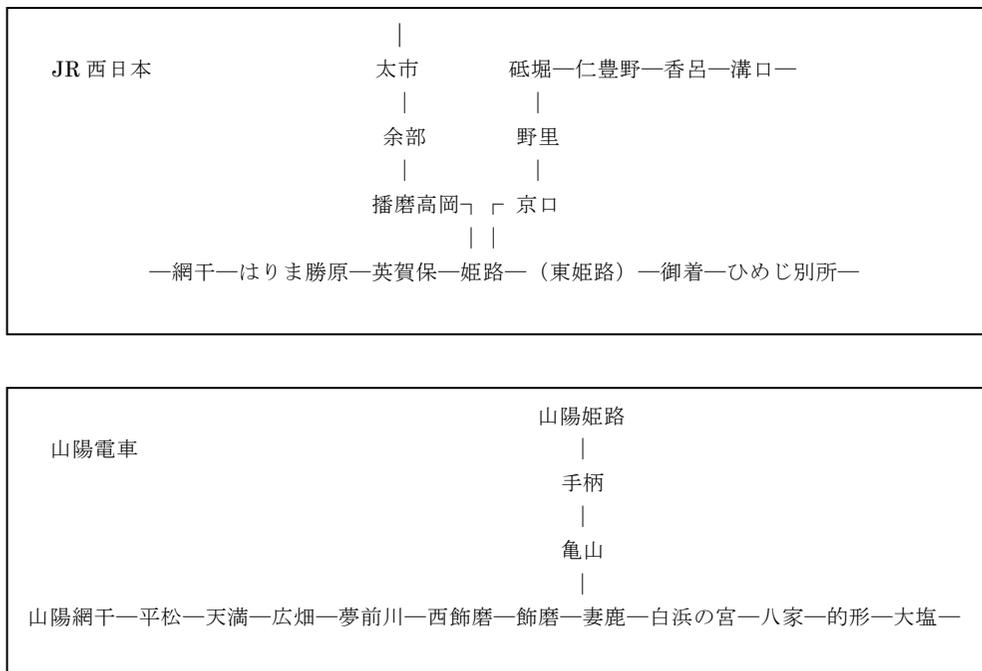


図 1. 姫路市内の JR 西日本（上）と山陽電車（下）の駅
出所：筆者作成

4. 姫路駅周辺の開発

2011（平成 23）年頃から姫路駅周辺では開発、整備が進み、大きく様相を変えている。

(1) キャスティ 21

キャスティ 21 とは、JR 山陽本線姫路駅付近の連続立体交差事業と関連道路事業、姫路駅周辺区画整理事業の大きく 2 つの事業からなる姫路駅周辺開発計画である。その目的とおもな内容は次のようにまとめられる。

交通の円滑化

- ・姫路駅周辺部の南北を結ぶ都市計画道路が、4本10車線から10本28車線へと大幅に増加する。
- ・JR線高架後は、合計7か所の踏切がなくなり、踏切遮断による交通渋滞や踏切事故が解消される。

土地の有効利用

- ・姫路市中心部にあった鉄道の貨物基地、車両基地が転移し、その跡地である約26haの広大な土地が新たに利用できるようになる。
- ・姫路駅周辺に南北を平面で結ぶ道路や通路ができるため、行き来がしやすくなり、鉄道で分断されていた土地を連続した都市空間として利用できる。

交通結節点機能の向上

- ・駅前の北広場が広がり、バス・タクシーの乗り降りがスムーズになるとともに、新しい交流空間が整備される。

(2) 姫路駅前広場

2008(平成20)年から2015(平成27)年の8年間に姫路駅前の広場の開発、整備が進んで、その面積は約6,400m²から2.5倍の約16,000m²となり非常に広がった。この駅前広場を使って賑わいのある中心街を作るための取組が盛んに行われている。

2016(平成28)年現在、駅前広場は「姫路駅北にぎわい交流広場」として利用されている。この広場が完成するまでの工事期間中には、一部供用開始されている公共空間を使用して「チャレンジ駅前おもてなし」が2013(平成25)年8月23日から2015(平成27)年3月31日まで開催された。まちの活性化につながる駅前広場の活用方法を姫路市と民間が一体となって試行、検証しながら、駅前広場の活用と管理のルールづくりを行うための社会実験である。2015(平成27)年の2~3月の期間だけでも23のイベントが行われ、くつろぎと賑わいの空間を創り出すことに成功している。

5. はりま勝原駅周辺の地域変化

2008(平成20)年、はりま勝原駅が新設開業し、その周辺地域は大きく変貌した。

(1) はりま勝原駅の計画

新駅設置の理由は、姫路市中心部や神戸方面への閲覧の起点とすることや、駅前広場、接続道路、自由通路等の関連交通施設の整備、自動車やバス、自転車などとの結節性の向上などである。また、交通モードの転換を図り、自動車から鉄道への利用転換を促進することによって、周辺道路の混雑の解消および健全な市街地形成を図ることである。

(2) 商業施設と住宅地

はりま勝原駅の開業とともに、その周辺には住宅地が徐々に広がっている。表2に示すように都市計画が進められ、道路や公園が新しく整備されて、商業施設もできたことによって、駅周辺に新居を建て暮らそうとする人が増えたものと考えられる。

図2の姫路市の小学校区の地図に、はりま勝原駅周辺の1.5km圏と2.0km圏を示した。1.5km圏内には勝原、大津茂、大津、広畑第二、八幡の5つの小学校区、2.0km圏内には広畑、南大津、旭陽、網干の4つの小学校区がある。

1.5km圏内の小学校区の人口(図3)は、2000(平成12)年から2015(平成27)年の16年間に、どの小学校区でも緩やかに上昇している。2010(平成22)年から2011(平成23)年にかけてピークを迎えていることも特徴的である。2008(平成20)年に、はりま勝原駅が開業したことによって、その周辺の人口が増えたということが考えられる。

一方、2.0km 圏内の小学校区の人口（図4）は、同時期、横ばいまたは減少している。2.0km 圏内では、はりま勝原駅よりも既存の英賀保駅または網干駅のほうが近い。そのため、新駅による利便性の向上が少なく、転居する人があまりいなかったと考えられる。

1.5km 圏内の広畑第二小学校区では、2000（平成12）年からの10年間で人口が8,144人から10,314人へと2,170人増加している。1.5km 圏内の5つの小学校区全体では、10年間で54,768人から60,145人へと、約10%に当たる5,377人もの人口が増加した。2.0km 圏内では、2000（平成12）年からの10年間で人口が増加している小学校区は1つもなく、4つの小学校区全体の人口も、10年間で33,905人から32,096人へと約6%、1,810人が減少している。

2008年（平成20）年にははりま勝原駅が新設開業したことにより、姫路市中心部や神戸方面への閲覧がしやすくなったのは確実である。このような地域間を結ぶ交通条件と合わせて、新駅周辺地域内で住宅地や商業地、道路などの都市整備が計画的に進められた。両者が相乗的に効果を高めたため、大幅に人口が増加し、新しい市街地が形成されたのである。

表1. はりま勝原駅関連の年表

年	年月日	出来事
1994	平成6年	姫路市が一带を「姫路新業務拠点」として位置づける。
2002	平成14年	姫路市からJR西日本に新駅の設置要望書「市内2つの駅をリレー方式で開業する覚書」が提出される。開業目標を2007（平成19）年度とした。
2005	平成17年	はりま勝原駅（予定）の駅前広場を含む都市計画道路の変更を行う。
2008	平成20年3月15日	はりま勝原駅が山陽本線英賀保駅－網干駅間に新設開業。

出所：姫路市（2009）『平成21年度新駅・基幹交通網整備促進特別委員会行政視察報告書』より作成

表2. 姫路市の新日鉄関連の都市開発

年	出来事
1950	昭和25年 富士製鉄発足
1958	昭和33年 新日鉄大津アパート完成
1996	平成8年 大津・勝原地区で「フェアヴィラージュあやみの」分譲開始
2002	平成14年 京見地区で「ヒルズ京見町」分譲開始
2004	平成16年 大津・勝原地区に「イオンモール姫路大津」オープン マックスバリュート熊見店リニューアルオープン
2006	平成18年 大津・勝原地区に「朝日スポーツクラブ BIG-S 姫路」オープン
2008	平成20年 JR「はりま勝原駅」開業
2011	平成21年 大津・勝原地区で「ブルームガーデンのぞみ野」分譲開始

出所：新日鉄不動産HPより作成

6. おわりに

鉄道駅は、宿場町の「駅」から、人々を運ぶ「駅」へと変化してきた。単純に「駅」といっても、時代と場所によって、役割や価値が大きく変わるものである。鉄道が誕生した明治から現在まで、鉄道駅は、戦争のために使用されたり、平和や復興を象徴したり、郊外から都心へ人を運んだり、その時代に合わせて役割を変化させながら発展してきた。鉄道駅は新設されるものあれば、その一方で廃止になる駅もある。人々の暮らしの変化と

ともに、鉄道駅も日々変化している。人々の郊外への流出に歯止めをかけるために、姫路駅前の整備や、活気と賑わいのあるまちづくりが進められている。まちづくりには、開発や整備に直接かかわる人々以外にも、地元の人や観光客の存在が欠かせない。鉄道駅が私たちの生活の中心になっており、住みやすいまちづくりの基盤となっている。

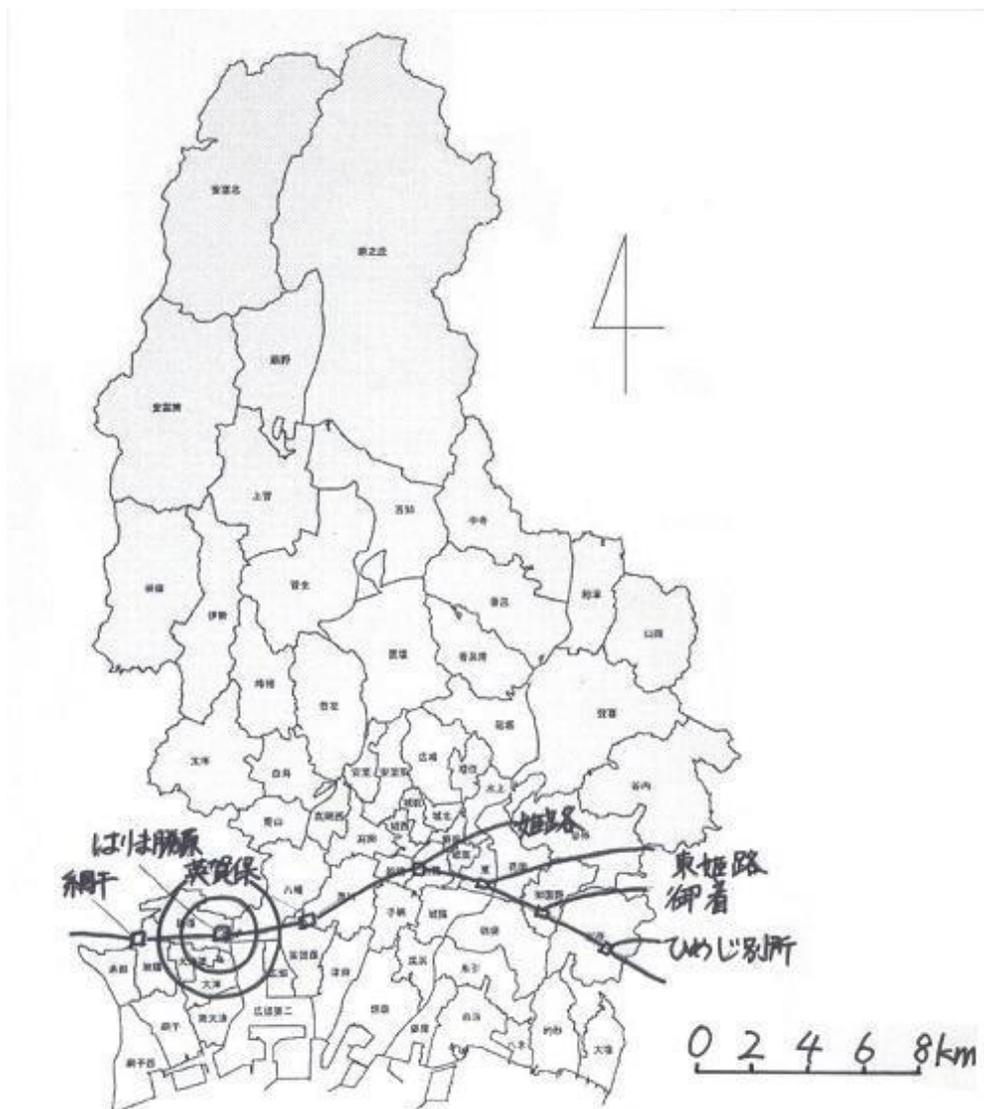


図2. 姫路市の小学校区とはりま勝原駅周辺（1.5km圏と2.0km圏）
出所：姫路市統計情報のウェブページをもとに筆者作成

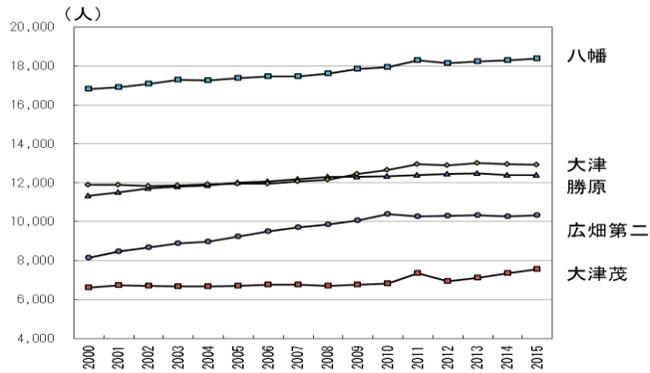


図3. はりま勝原駅 1.5km 圏内の小学校区の人口推移
出所：姫路市統計情報より作成

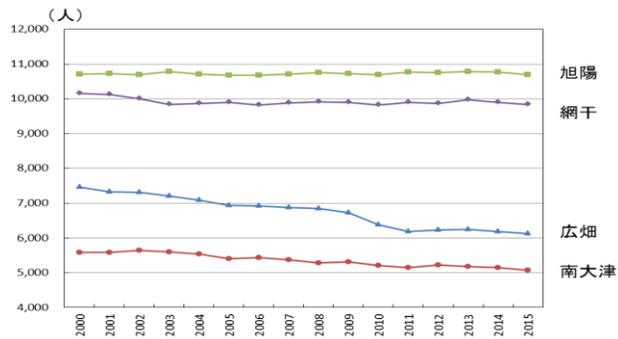


図4. はりま勝原駅 2.0km 圏内の小学校区の人口推移
出所：姫路市統計情報より作成

参考文献

- 野村正樹 (2010) 『鉄道地図から歴史を読む方法』河出書房新社, 95p.
- 姫路市都市拠点整備本部姫路駅周辺整備室 (2015) 『キャストィ 21 の推進～「姫路駅周辺整備室」について～』姫路市役所, 28p.
- 姫路市 (2015) 『JR 山陽本線等姫路駅付近連続立体交差事業』冊子, 姫路市役所, 8p.

参考 URL

- 平良清忠 (2009) 『平成 21 年度新駅・基幹交通網整備促進特別委員会行政視察報告書』, 12p.
<http://www.city.narita.chiba.jp/DAT/000070320.pdf> (2014 年 5 月 4 日閲覧)
- 新日鉄興和不動産ホームページ『フレームガーデンのぞみ野』
<http://www.nozomino.com/result/> (2015 年 7 月 1 日閲覧)
- 姫路市統計情報ホームページ, 町別人口統計
<http://www.city.himeji.lg.jp/toukei/menu1.html#menu1-2> (2016 年 1 月 5 日閲覧)

Location of Land and Use around Railway Stations

—Focusing Himeji Station and Harima-Katuhara Station in Himeji City Area—

KITAGAWA Junya

Key Words: railway station, Himeji City, new located station, development around the station, residential areas